

## ● 制作

# 0. 3haの存在価値

## —震災復興小公園における実験的デザインの提案—

Non-use Values of 0.3 Hectares: Proposals of Experimental Design of the Reconstruction Small Parks of the Great Kanto Earthquake in Tokyo

廖 小羽 園芸学研究科 緑地環境学コース 環境造園学領域 (主指導教員: 木下 剛)  
LIAO, Xiaoyu

### 1. 研究の背景と目的

1923 年の関東大震災において、東京都は約 40%が焼失し、その後帝都復興事業が実施された。それによって、東京市では 3 大公園、および小学校に隣接した 52 小公園が新設された。鉄筋コンクリート造の不燃建築 (小学校) と一体で設置され、延焼防止と避難地としての機能を有するこの 52 個の小公園は、震災復興 52 小公園と呼ばれている (以下、「小公園」と略称)。小公園は 1931 年で全事業が終了となり、その後 90 年が経過し、市街地の大きな変化に伴い震災復興公園の施設や役割も変化した。

帝都復興事業以降、東京都では時代に合わせた公園整備が継続されてきた。したがって、当時の小公園は防災機能や、地域コミュニティの核となるほか、都市環境の美化など、数多くの役割を持っていた。

小公園は戦後に東京都から各特別区へ移管され、以来、本来の機能を継続し、公園の利用価値を重視しながら改修された小公園が多く見られる。

しかし、少子高齢化の進行やライフスタイルの変化といった現代社会情勢の変化に伴い、昔ながらの小公園は都市緑地としての役割を十分に発揮できていない。一方、市街地の建設や発展は益々進み、都市緑地が貴重な資源となるなか、多様化するニーズに合わせた公園整備が、今後ますます求められていくと考えられる。

建設から 90 年たった現在、日本が直面している社会的課題は大きく変化した：都市緑地の質、環境問題の深刻さ、多様な災害リスクなど、これらの課題に対応できる、普段利用と防災減災に役立つ、新しい公園像が求められている。

本制作では現存する震災復興 49 小公園のうち 5 箇所を対象とし、存在価値の最大化を優先した公園設計を提案する。また、このような公園を利用する際、都市緑地の使い方も変わることが考えられる。

### 2. 研究対象

2021 年現在、49 箇所の震災復興小公園が東京都内に現存している。

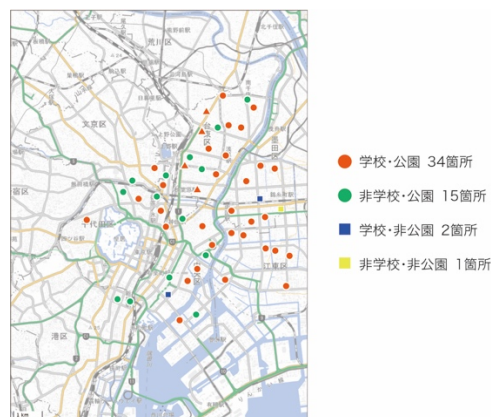


図 1. 震災復興小公園・小学校の分布および利用現状 (2021 年)

### 3. 調査と分析

#### 3.1 都市スケール分析

都市スケールから見た、都市の要素としての小公園の位置付けおよび各小公園所在地の性格を把握するため、下記の 2 つの調査を行う。

A. 現存する小公園の基本情報を把握するため、既往文献や Google マップを用いて把握した。具体的には、小公園の住所・面積・用途地域類別・小学校の存在・同一敷地内他の建物の有無などの基本情報を記録し、3.2 公園スケールにおける現地調査の基礎とした。

B. 小公園とその周辺の土地利用の性格を明らかにするため、「東京都平成 28 年度区部土地利用現況調査・建物用途別」から、各小公園を中心に、直径 250m 範囲内の建物用途図を作成した (図 2.)。

都市スケールにおける調査の結果 B. 「震災復興 49 小公園建物用途図」の結果をさらに類型化する。

類型化の結果 (類別) 住宅類: 27 箇所、事務所類: 17 箇所、公共施設類: 3 箇所、商業施設類: 2 箇所となった。

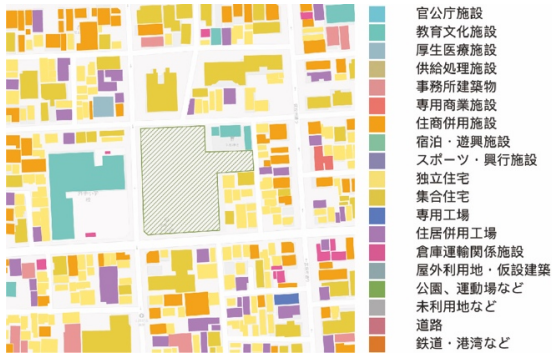


図 2. 震災復興 49 小公園周辺建物用途図例

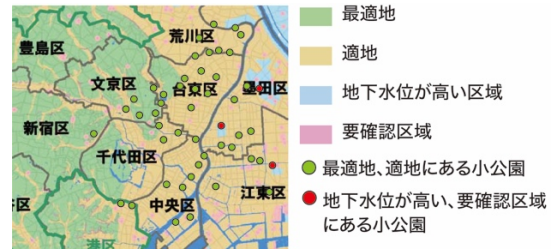


図 4. 震災復興 49 小公園と雨水地下浸透適地マッピング図

### 3. 2 公園スケールの分析

都市スケールで把握した小公園の基本情報に基づき現地調査を行った。



人形町駅近くにある久松小公園は繁華街の真中にある公園。久松小公園の一部は、平日に小学校校舎の延長として、それ以外の時間は一般市民へ開放する仕組みとなる。そこで、開口空間の変化により、時間帯によって柔軟に対応できる公園提案ができることを考えられる。

図 3. 現地調査記録例

### 3. 3 オブジェクトスケール

現在の小公園の整備状況を把握し、小公園の未来像を描くため、さらに小さいスケールの調査を行った。

多様な災害へ柔軟に対応ができ、減災防災に役立つなど、新しい時代に求められている機能を備えた小公園を提案するため、現存するオブジェクトをグリーンインフラの要素として読み替えるための調査を行った。

表 1. グリーンインフラの要素から見る小公園のオブジェクト

名称	概要	写真		
縦溝の非接続	屋根からの雨水を下水道に流さず、雨水タンクや貯水槽、あるいは透水性舗装へ導入する手法。合流式下水道の都市に特に有益			
雨水の利用	雨水を収集・貯留し、雨水流出速度の低減、減量を図るとともに、建物内部の雑用水や災害時の水資源として活用するシステム			
雨庭	屋根や歩車道からの流出水を収集して地中に浸透及び浄化できるように設計された窪地。自然生態系の基地に			

### 3. 4 基盤調査

存在価値を最大化する公園を提案するため、小公園の所在地の雨水浸透適地マップ、浸水想定地域を調査した。

## 4. 考察

### 4. 1 小公園の空間構成と位置付け

現在の小公園の内部空間は機能的空間のユニットから構成されている。機能性を優先する、すなわち利用価値を優先とする設計方法を採用することで、都市緑地の存在価値は単なる後付けのメリットの状況に至る。

しかし、過密都市と指摘されている東京としては、面積 0.3ha の小公園のような緑地でも発揮できる、防災減災や環境改善に役立つ存在価値も重要である。小公園の存在価値と利用価値のバランスを変えることで新しい風貌の小公園が作れると考えられる。

### 4. 2 0.3ha の小公園の機能

小公園を調査した際、図 3-1-a のような標識が多く見られた。「なんでもできる空間」を目指したが、結果的になにもできない公園になっている。面積が 0.3ha しかない小公園に対しては、利用者が期待している機能を複数の公園に分散させ、一つの小公園に対しては機能を絞ることとした。

### 4. 3 震災復興小公園・一般的な街区公園

「震災復興小公園」建設当初の姿を留める小公園はほぼない。小公園は 1930 年に全て竣工し、当時の設計者や都市計画者に高く評価されており、現在に至る都市公園の基本形がこの時作られたと言われる。昭和 31 年（1956 年）、都市公園法の制定によって「都市公園」の設置と管理の方針が明確化され、整備目標も設定された。以降、公園の「量」が求められる。それ以前に誕生した小公園もその後特殊性が失われ、改修整備も次第に画一的となった。

震災復興小公園は小公園として先駆的存在であり、小学校とセットで設置されていることから、一定量の利用者が存在し、実験的デザインの提案に適していると考えられる。

## 引用文献

- 1) 東京都都市整備局 (2016) 「平成 28 年度建物現況調査」
- 2) 木田幸男 (2016) 「自然の力を都市の力に」『決定版！グリーンインフラ』, p. 122-123, 日経 BP 社
- 3) 東京都下水道局 (2019) 「浸透敵地マップ」『雨水浸透ハンドブック』
- 4) 東京都建設局公園緑地部管理課編 (1985) 「東京公園の 100 年」p. 65, 東京都建設局公園緑地部 (主査：池邊このみ, 副主査：木下剛, 竹内智子, 霜田亮佑)

